



e-La Voz

「エー・ラ・ボス」と読みます

HCJB『アンデスの声』 日本語放送 メールマガジン (第15号)

2004年2月3日発行

シカゴ報告 — 賛美歌とともに

雪原を突っ走る馬ソリ、澄んだ鈴の音、色とりどりの防寒衣に身を固めた子供たちが、ソリの上で声をはりあげて歌います。その楽しそうな歌声は白い地平線のかなたにまでこだまとなって響いていきます。私もふりおとされないようにしながらクリスマス・キャロルをいっしょに歌いました。顔にふりかかる雪片が舞いながら口に入り喉をうるおしてくれます。私にとっては北海道での初めてのクリスマスでした。

私は子供の頃から音楽が好きでした。下町育ちではレコードや楽器を手に入れる金銭的余裕はなかったので、もっぱらラジオで音楽をきき、歌詞をノートに書き取って鼻歌まじりに歌い、中学、高校、神学校にすすんでからは、率先して合唱団に入り、世界の名曲を美しいハーモニーで堪能してきました。私の人生ドラマの各シーンにはちょうど映画音楽のように、その場面をうつす歌や曲がちりばめられています。

1958年〔昭和33年〕当時陸上自衛隊員だった私はキリストの兵士になろうと決心し、消え残る雪の札幌をあとに、ひとりの知人も、友人も、先輩もない東京の神学校へ向かったのです。将来にたいする目標は定めたものの、信仰生活の浅い私にとっての入学式は喜びよりもむしろ不安な気持が強く、学校全体が自分の上ののしかかってくるような息苦しい気持でした。式のあとの食堂での新入生歓迎祝賀会でも依然として落ち着かず、周囲の視線に「お前のような畑違いのものが、神学校などに入ってどうなるものか」と自問自答をくりかえしながら、身のおき場がないおもいで悩んでいました。するとその時、静かにひとりの女教師が立ち上がって賛美歌をうたいはじめたのです。

神の秘めたもうところにかくれ みたすけうくるは いかにしたのしき
あくまのたくみも 世のわずらいも 知らずして過ぐる 身のうれしさよ

美しいソプラノの清らかで澄みわたった声が、私の身と心の内側からしみわたっていくようでした。「そうだ自分ではない。神にみいだされ、救われ、そして神の召集をうけて遣わされてきたのではないか。自分のようなものでも選ばれて、神の秘められた計画のなかにおかれているのだ」。目を閉じてききいる私の心の耳に歌はさらにつづきます。

<あやまつときには おしえをたれて 飢えたるところに ちからをたもう>

「はじめから完全な者はいないはずだ。神から働き人となるための訓練をうけるためにきたのだから、ここではすべてに耐え、心身霊ともに練り鍛えてもらって将来に備えればいいのだ。信仰の創始者であり、完成者であるイエスを総司令官として、その指揮のもと前進あるのみだ。」

<さだめなき雲の うき世をすてて 神の秘めたもう ところにいけば
めぐみのみ顔の ただあおがれて とうときみすがた うつるもうれし>

卒業式の翌日、茅ヶ崎の教会で結婚した私は二年後には、南米エクアドルに電波宣教師として遣わされていきました。神はその秘められた遠大な計画に参加したものを思いどおりに動かされます。力のないものでも一方的恵みで支え助けてくれるのです。なかでも賛美は私の信仰生活のエネルギー源となり、アンデスの峰からも13,394日にわたって電波に乗った賛美の霊が全世界に満ち満ちていったのです。

その夜、賛美歌528番をうたったのは、同神学校の音楽教師三谷幸子師でした。在学中の四年間、私は聖歌隊に参加させてもらったおかげで、数えきれないほどの楽しい思い出をつくることができました。三谷先生の厳父、三谷種吉は日本の音楽伝道の草分けで、明治20年代後半から30年代にかけてわらじ履きで津々浦々をめぐり、西洋音楽とは無縁だった町や村に賛美をたずさせて伝道したのです。その父の薫陶をうけた幸子師も教会や信徒の日常生活のなかで生きて働く賛美をねがって意欲的に活動し、1982年に72歳で大学教授を退任してからも、教え子の教会をめぐり、賛美指導や集会での賛美をつづけました。国内

だけではなく、台湾、東南アジア、北米、南米にも足を伸ばし、1994年には、南米聖歌がクワイヤーブックで紹介されていることもあって「アンデスの声」30周年のお祝いをと、記念ツアーに加わってHCJBまでかけつけてくださいました。

2000年5月、教え子たちが編成したクワイヤーによるミレニアム・コンサートが東京の世田谷中央教会でひらかれました。すでに幸子師の耳は高齢のため音をはっきりと聞き分けることができません。「神様、私ができないのをご存じなので、あなたが責任をとってください」こう祈った幸子師はいつものように指揮棒をふりました。その時のことを三谷種吉伝(いのちのこば社)のなかで幸子師はこう述懐しています。「私の耳は音がぼやけて聞こえるのですが、心の耳には、昔この人たちが歌った美しい声が残っていました。その声を思い出しながら指揮し、皆さんに『先生は昔と少しも変わりませんね』といわれました。歌っている間中、主の臨在が会堂に満ち、それがひしひしと体に伝わってくるほどで、クワイヤーの方々ともどもその感動に満たされながら賛美しました。それはこれまでのコンサートでも感じとってきたことでしたが、このときほど強く感じたことはありません。その意味で、賛美として最高のものをおさげできたと思います。それはひとことと言えば、多くの方々が背後でささげてくださったとりなしの祈りに神様が答えてくださり、すべてなしてくださったからにほかなりません。」



今夜も凍(シバ)れた空からふわりふわりとうまそうな雪が、ここ北米中西部シカゴの街に舞っています。赤道直下、海拔三千米の高山都市キトでは一年中平均気温が22度でした。長い間、常春の生活になれていた私たちには北半球の冬はいささか厳しい感じです。今年は文字通りホワイト・クリスマスのなかを教会の聖歌隊グループとキャロリングにでかけました。家々をまわって最後にそと病床にいる久子の部屋に近づき、窓越しに突然歌いだしたので、いきなり響いてきた天使？の歌声に久子もびっくりしたようでした。一種のショック療法だったのか、その後ぐんと元気をとりもどしたので、これもただただ賛美のめぐみと感謝している今日このごろです。

私は、主の恵みを、とこしえに歌います。〔詩篇 89. 1〕

HCJB日本語放送担当

在 主 尾 崎 一 夫 久 子

【ホームページのご案内】

HCJB日本語放送のホームページ(<http://www.hcjb.org/japanese/>)には、リスナー・コミュニケーションのためのふれあいコーナー「[フォーラム](http://www.hcjb.org/japanese/forums/)」(<http://www.hcjb.org/japanese/forums/>)と、メールマガジンのバックナンバーを揃えた「[メールマガジン e-La Voz らいぶらり](http://www.hcjb.org/japanese/mmoz/)」(<http://www.hcjb.org/japanese/mmoz/>)のページがあります。どうぞご利用ください。

このメールマガジンは、HCJB日本語放送の管理するメール・リストに登録されている方に無料でお送りしています。

このメールマガジンをご覧になってのご感想やご意見、ご要望などは、[HCJB日本語放送](#)までお送りください。

また、このメールマガジンの配信停止、配信先変更、あるいは新規ご登録は、下の該当ボタンを選択し、必要事項をご記入の上、[この内容で送信する] ボタンをクリックして、手続きをお願いします。なお、**Netscape 6.2以降をお使いの場合、このメールマガジンに埋め込まれているご登録手続きの機能はご利用いただけません。**ご面倒ですが、[HCJB日本語放送](#)まで別途メールにてお知らせください。

○ 配信の停止 (※重要:必ず現在メールマガジンの配信登録されているメールアドレスからご送信ください。)

○ 配信変更先のメールアドレス 碩電

(※重要:必ず現在メールマガジンの配信登録されているメールアドレスからご送信ください。)

○ 新規登録するメールアドレス 碩電

この内容で送信する

リセットする

※お送りいただいた内容はメールリスト・サーバにより自動的に処理しますので、余分な内容は一切入れないでください。
※このメールマガジンはコンテンツが大きいため、携帯電話への配信はできません。



Copyright © 2004 by HCJB. All rights reserved.

日本語ホームページ: <http://www.hcjb.org/japanese/>

Eメール: 碩電 kozaki@hcjb.org

郵便の宛先:

Mr. & Mrs. Kazuo Ozaki

1920 Berkshire Pl., Wheaton, IL 60187-8050, U. S. A.